



京都府地域文化創造促進事業
2022年度 実施報告

京都府地域文化創造促進事業
2022年度 実施報告

目次

はじめに 京都府地域文化創造促進事業について	2
地域の文化芸術活動を支援する体制	3
KYOTOHOOP	4
地域アートマネージャー	6
伴走支援	8
地域プログラム	10
Nantan Remix 2022	11
風景泥棒はどこへ? - 地域×現代アートを語り合う	20
リアルコンサートホールで何が出来る?	24
地域文化における協働の可能性~文化インフラの形成について~	28
京都:Re-Search 2022	31
in 与謝野	32
in 綾部	38
次世代育成事業	43
文化を未来に伝える次世代育み事業「地域・アート・出会いプロジェクト」	44
次世代アートツアー「教えてウォーホル! What is POP?」	46
おわりに	52

はじめに

京都府地域文化創造促進事業について

南北に長い地形を有する京都府には、地域ごとに様々な文化や人が根ざしています。【京都府地域文化創造促進事業】は、そんな京都府が目指す「文化力による未来づくり」を府域一体で促進するために、効果的に地域文化を支援する体制として、2019年度から京都府に任用された文化芸術の専門人材を軸に開始しました。それぞれが居住地域に誇りと愛着を持ち、地域文化を大切にしながら新しい文化も生まれ続けるような、地域に活力を生み出すための社会づくりに寄与することを目的に事業を展開しています。

2022年度は、京都府の専門人材をはじめとした文化芸術を担う事業者と、京都府域に根付く「人・場所・コト」の交流を促進し、誰もが主体的に文化芸術活動に関わることができる環境づくりや、アーティストの視点から地域の魅力を再発見する機会を創出しました。

本冊子は、2022年度に展開した事業をまとめたものです。これまでに生まれた繋がりが拡がり続けるよう、活動をアーカイブし、共有することで、皆様と共に文化芸術による地域振興の「未来」を検討する機会にしたいと考えています。

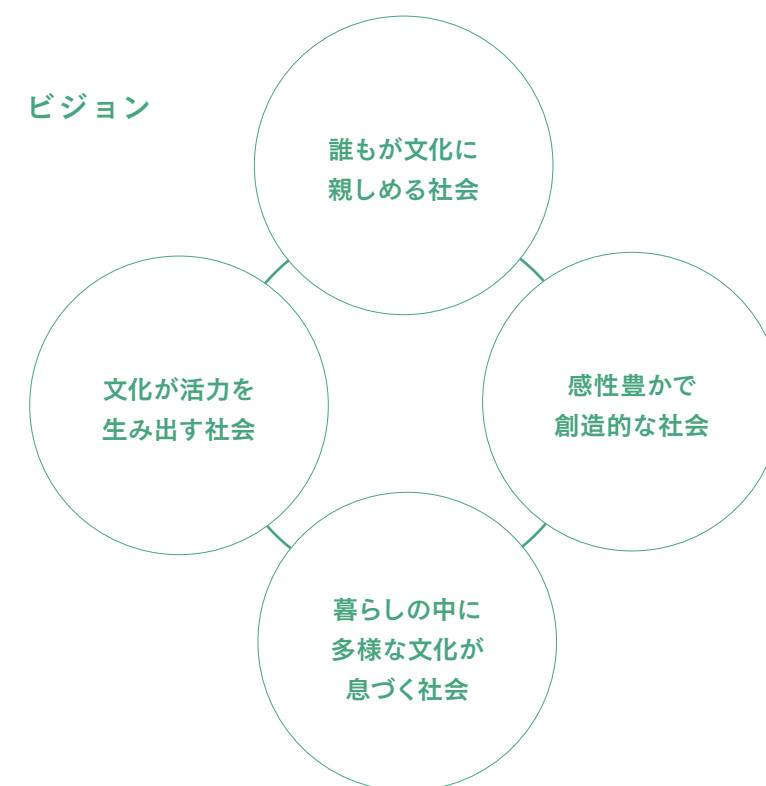
末尾になりましたが、本事業に対して多大なるご支援、ご協力を賜りました皆様に厚く御礼申し上げます。

京都:Re-Search実行委員会
(事務局 | 京都府文化スポーツ部文化芸術課)

地域の文化芸術活動を支援する体制

本事業は、事業統括・企画立案や情報発信・文化芸術支援活動を行う「プログラムオフィサー」「プログラムコーディネーター」を京都府文化芸術課に、各地域の文化芸術に対する支援相談員である「地域アートマネージャー」を京都府広域振興局(4エリア)に配置し、京都府と市町村等で構成された「京都:Re-Search実行委員会」等の団体や、地域発のプロジェクトを通じて事業を展開しています。

ビジョン



実態調査・情報発信

KYOTOHOOP

2022年度は、京都府域で活動するクリエイティブな人・場所・コトを繋げるための文化芸術情報サイトを開設しました。府域で活動する人や施設などを地図上に記録していくことで、人と人、場所と人など、文化芸術と地域が自発的に繋がる有機的な文化芸術のネットワークを「KYOTOHOOP(きょうとふーぶ)」と名付け、可視化し、育むことを目的に運営しています。人や場所の紹介以外にも、新しいコトを起こすきっかけとなるよう各地域で展開されるプロジェクトの情報や、KYOTOHOOPを深める記事なども更新中です。

HP



YouTube



情報提供のお願い

京都府地域文化創造促進事業では、個々人の視点も必要としています。Instagram等のSNSで、ハッシュタグ「#kyotohoop」または「#きょうとふーぶ」をつけて、京都府域で見つけた文化芸術を感じる人や場所、体験をご共有ください。

HP | <https://kyotohoop.jp/>
YouTube | @kyotohoop

Instagram
@kyotohoop

ロゴコンセプト

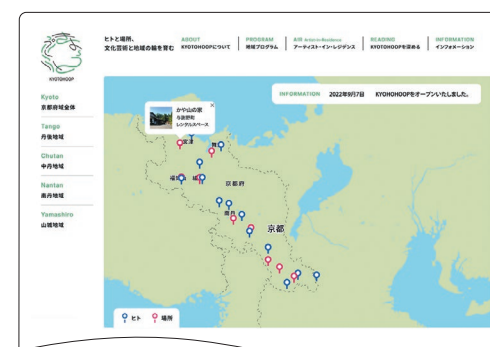
各地域の人的ネットワークを表す「輪・縁・円」を連想する柔らかさと丸みをもち、京都府域の豊かな「海・森・空」を連想させる青緑(エメラルドグリーン)を使用したロゴを、デザイナーの三重野龍氏に制作を依頼。「かるやかに、ゆるやかに、いくつもの線が繋がり、輪になった時に“きょうとふーぶ”が現れる」というイメージのもと制作されました。



Pickup

KYOTOHOOPのヒトと場所 | Mapping

京都府内4エリアで支援活動を行う「地域アートマネージャー」たちが、これまで出会い、繋がってきたクリエイティブな人と場所を地図上で紹介しています。



KYOTOHOOPを深める | Reading

人や場所や、地域で起きている「地域プログラム」をはじめとした「コト」について深掘りした記事や、次世代に向けた取組事例など、京都府の文化芸術の輪=KYOTOHOOPが深まる情報を発信しています。



地域文化芸術活動の支援相談員

地域アートマネージャー

京都府では、2017年度より文化芸術活動の支援相談員兼企画者である「地域アートマネージャー」を任用しています。京都府広域振興局（丹後・中丹・南丹・山城）ごとに1名が配置され、各振興局が管轄する地域内の住民や自治体等からの文化芸術に関する相談に対し、活動持続や発展のための助言や伴走支援を行っています。また、地域振興や地域の文化芸術活動の強化に寄与することを目的とした「地域プログラム」の企画立案・運営等も行っています。

地域アートマネージャーの各担当区域



地域アートマネージャーの役割

地域の文化芸術の実態調査およびネットワークの形成

地域住民や文化芸術団体、自治体等からの相談対応

地域発のプロジェクトの伴走支援

地域プログラムの企画立案・実施

伴走支援

地域発のプロジェクトや取組には、助言だけでなく、持続的な運営基盤を固められるよう伴走支援を行っています。2022年度には、地域アートマネージャーは担当の地域だけでなく、地域を横断し、それぞれの専門性を発揮しました。

2022年度の主な支援組織・プロジェクト

(支援を担当した地域アートマネージャー)

京丹後市 | 京都府立峰山高等学校探究授業アートチーム (丹後地域担当)

京丹後市 | 『TANGOまるっぽ美術館』(丹後地域担当・南丹地域担当)

京丹後市 | 『三津のちいさな芸術祭 織りかえす波の音』(丹後地域担当)

福知山市 | シンマチサイト実行委員会 (中丹地域担当)

南丹市 | 『アートフェスティバル in やぎ』(南丹地域担当)

精華町 | けいはんなプラザ開業30周年プレイベント
～ダイバーシティ&インクルージョン～ (山城地域担当・南丹地域担当)

南山城村 | 『やましろミュージックキャンプ』(山城地域担当)

Pickup

シンマチサイト実行委員会

福知山市



シンマチサイト実行委員会は、2018年度に開催された展覧会『大京都 2018 in 福知山』を契機に、地元の有志が立ち上げた文化活動団体です。展覧会場となった旧家具店を様々な表現に関わる人が創造的な活動を行えるアートスペースとして活用しており、展覧会やワークショップなどを定期的実施。企画立案、助成金活用などについて、地域アートマネージャーが助言などを行い、地域におけるアートスペース運営を協働で行っています。

2022年の主な支援内容

外部団体や個人によるスペース活用などへの助言や運営補助

イベント企画・運営補助

- ▶ シンマチミーティングvol.04-06 (イベント・展覧会)
- ▶ 妖怪画集をつくろう! 2022 (ワークショップ)
- ▶ ワンダーマーケットワークショップ (ワークショップ)

やましろミュージックキャンプ

南山城村



弦楽器を演奏する小学生から高校生までの子どもたちが、豊かな自然の中で一流の演奏家から音楽の指導を受ける取組として開催されたプログラム。山城地域の活性化や地域における文化芸術の振興を目的とし、未来を担う子どもたちを対象とするプロジェクトとして、地域アートマネージャーがプログラム設計から実施まで事務局運営をサポートしました。

主催 | 京都府/相楽東部「ひと・企業」誘致促進協議会

会期 | 2022年8月17日(水)・18日(木)

会場 | 南山城村文化会館「やまなみホール」

対象 | 小学3年生から高校3年生までの弦楽器を演奏する子どもたち

※最終日にはミニコンサートを実施

三津のちいさな芸術祭

織りかえす波の音 京丹後市



展覧会『大京都 2020 in 京丹後』の参加アーティスト・高橋臨太郎氏が網野町三津で作品発表をしたことを契機に、2021年5月、アートを通じた地域振興を目的に発足した地元有志による三津の灯台アートプロジェクト実行委員会の2年目のプロジェクト。実行委員会を始動した昨年度より継続して、企画、補助金申請、チラシ・記録冊子デザイン、運営への助言など、地域アートマネージャーが包括的なサポートを行いました。

主催 | 三津の灯台アートプロジェクト実行委員会

会期 | 2022年9月25日(日)

会場 | 網野町三津・三津漁港

アートフェスティバル in やぎ

南丹市



南丹市八木町の音楽祭『Yagi-JAM』が、展覧会『大京都 2021 in 南丹』を契機に、大堰川河川敷でのライブに加え、JR八木駅から大堰川へと続く街並みにアート作品を点在させる『アートフェスティバル in やぎ』を開催。地域発のアートフェスティバルを支援するために、地域アートマネージャーが出展アーティストを推薦したほか、連動企画として美術展覧会やタウンミーティングなどからなる「地域プログラム」を開催しました。

主催 | 京都南丹Yagi-JAM実行委員会

会期 | 2022年10月10日(月・祝)～10月23日(日)

会場 | 南丹市八木町駅前商店街・各店舗

写真 | 『アートフェスティバル in やぎ』での、薬師川千春『絵画の帆を張り波を編む』の展示風景

※展覧会『大京都』とは、京都:Re-Search実行委員会が主催するアーティスト・イン・レジデンス事業『京都:Re-Search』の成果発表展覧会のタイトルです。

地域プログラム

京都府地域文化創造促進事業では、文化芸術活動による地域振興を図ると共に、文化芸術の担い手を各地域の実情に合わせて育成するための取組として、地域アートマネージャーたちが企画する「地域プログラム」を実施しています。

2022年度は、アーティスト・イン・レジデンス事業*『京都:Re-Search』に触発された地域住民が主体的に立ち上げたプロジェクトと連動したイベントと、研修イベントを開催しました。

*アーティスト・イン・レジデンス事業とは？

芸術制作を行う人物を一定期間ある土地に招聘し、その土地に滞在しながらリサーチ活動や作品制作を行う機会を提供する事業のこと。

2022年度プログラム一覧

 **アートイベント** | Nantan Remix 2022

 **トークイベント** | 風景泥棒はどこへ？ -地域×現代アートを語り合う

 **研修イベント** | リアルのコンサートホールで何が出来る？

 **研修イベント** | 地域文化における協働の可能性 ~文化インフラの形成について~



地域プログラム | 南丹市 | アートイベント

Nantan Remix 2022

京都府南丹市では、2020年にアーティスト・イン・レジデンス事業『京都:Re-Search 2020 in 南丹』が、翌年2021年にはアーティスト・イン・レジデンス事業展覧会『大京都 2021 in 南丹—^{なんたん}南譚:介在する因子』を開催しました。この2年間の取組により、活動の拠点となった南丹市八木町の地域住民の一部は、アーティストたちが地域と交わり新たな表現を生み出すプロセスを真近で目にする事となりました。

その経験を受けて、空き店舗が目立つようになってきた商店街に芸術作品を展示する地域発のアートイベント『アートフェスティバル in やぎ』が計画されました。この地域団体による自発的な試みを支援しつつ、地域とアートがどのように接続／再接続され得るのかを考えるために、美術展覧会、タウンミーティング、アーティストトーク、ラウンドテーブル・ディスカッションの4つのプログラムからなるアートイベント『Nantan Remix 2022』を開催しました。

会期 | 2022年10月10日(月・祝)～10月23日(日)

※金・土・日・月のみ実施

入場 | 無料

来場者数 | 計814名

主催 | 京都:Re-Search実行委員会(京都府、他)

後援 | 南丹市

連動イベント | アートフェスティバル in やぎ
(京都南丹Yagi-JAM実行委員会)

Program 1 Nantan Remix 2022

Nantan Remix 美術展覧会

会期 | 2022年10月10日(月・祝)~10月23日(日)
※金・土・日・月のみ実施
時間 | 11:00~17:00
会場 | ちびねこ映写館/川定/オーヤマ・アートサイト
アーティスト | 荒木悠/身体0ベース運用法/
Yukawa-Nakayasu

京都府内で実施されたアーティスト・イン・レジデンス事業『京都:Re-Search』に参加経験のある3組のアーティストを招聘し、地域との関わりの中で生まれた作品による展覧会を開催しました。アーティストで映画監督の荒木悠は、2021年の南丹の展覧会場で起こっていた日常のドラマを淡々と、しかし丁寧に描き出した映像作品を、日本人が暮らしの中で培ってきた身体性を見つめなおし、現代生活への応用を試みる「身体0ベース運用法」の安藤隆一郎は、失われつつある川の文化について亀岡でリサーチした作品を、アーティストのYukawa-Nakayasuは、2020年に和束町にて滞在制作及び発表した作品に、新たに南丹市八木町の要素を加えてリミックスしたインスタレーションを展示しました。3組のアーティストのそれぞれに異なる視点と手法が際立つ展覧会になりました。

Program 2 Nantan Remix 2022

アーティストトーク

日時 | 2022年10月23日(日) 13:00~14:30
会場 | ちびねこ映写館/川定/オーヤマ・アートサイト
アーティスト | 荒木悠/身体0ベース運用法/
Yukawa-Nakayasu

Nantan Remix 美術展覧会出展作品について、作品のテーマやリサーチをした時のエピソードなど、アーティスト本人が鑑賞者へプレゼンテーションを行いました。



Nantan Remix 美術展覧会 | 出展作品

荒木悠

『京都:Re-Search 2020 in 南丹』、
『大京都 2021 in 南丹-南譚:介在する因子』ゲストアーティスト

《 tempo 》

会場 | ちびねこ映写館 作品写真 | 麥生田兵吾



荒木は2021年のアーティスト・イン・レジデンス事業展覧会で、南丹市八木町の駅前商店街空き店舗など5箇所作品を展示しました。その中の一つである旧小川お茶店では、曜日・時間限定で「八木野菜花市」という店が開かれていました。荒木は展覧会中に自身の作品の展示風景を記録し始めたのですが、やがてそこで店番をしている八木悟さんに焦点を合わせるようになります。そうして、一人の男性の姿を通して八木の日常に流れる様々なtempoを描き出す、実験的ドキュメンタリー作品が生まれました。

《 tempo 》2022年/HDV映像、サウンド/20分
出演 | 八木悟
撮影場所 | 八木野菜花市(旧小川お茶店内)
撮影期間 | 2021年10月1日~11月7日

Yukawa-Nakayasu

『京都:Re-Search 2019 in 和束』、
『大京都 2020 in 和束-未開へのわだち』ゲストアーティスト

《 未開地のアフォーダンス (Nantan Remix Ver.) 》

会場 | オーエヤマ・アートサイト 作品写真 | Yukawa-Nakayasu



《未開地のアフォーダンス (Nantan Remix Ver.)》インスタレーション風景 (会場入口)

Yukawa-Nakayasuは、2020年のアーティスト・イン・レジデンス事業展覧会にて滞在制作、発表した作品《未開地のアフォーダンス》に、新たに南丹地域の物語を編み加えました。そのために八木町で約2週間のリサーチおよび滞在制作を実施。この土地と深く結びついた「水」を核とした作品へと再構築していきました。



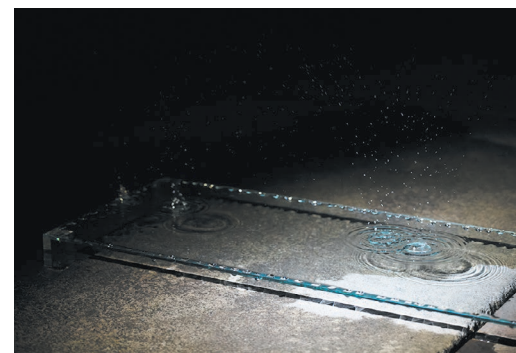
《未開地のアフォーダンス (Nantan Remix Ver.)》部分 (井戸水、米、五円)



《未開地のアフォーダンス (Nantan Remix Ver.)》部分
(南丹浄化センターの浄化水、水槽の水草と微生物)



《未開地のアフォーダンス (Nantan Remix Ver.)》インスタレーション風景 (会場奥)



《未開地のアフォーダンス (Nantan Remix Ver.)》部分 (井戸水、ガラス)

展覧会場となったオーエヤマ・アートサイトは、元酒蔵。そこには、お酒造りになくてはならない良質な地下水を汲み上げ、余った水を大堰川へと排出する水の循環システムがありました。Yukawa-Nakayasuは、そんな場所の特性を尊重しながら自身の作品へ取り込みました。

ドキュメンタリービデオ
YouTube | @yukawa-nakayasu



身体0ベース運用法 (安藤隆一郎)

『京都:Re-Search 2018 in 亀岡』、『大京都 2019 in 亀岡-移動する有体*』参加アーティスト
*新型コロナウイルス感染症の影響により開催中止

《 OGYM-日本身体遺産 保津川下り編 》

会場 | 川定 作品写真 | 麥生田兵吾



身体0ベース運用法の安藤隆一郎は、1400年もの歴史がありながら途絶えてしまった「桂川(保津川/大堰川)の水運」にまつわる身体技術の継承のため、保津川下りの船頭に弟子入りしました。たくさんの人々が長い時間をかけて育んできた、しかしながら現代の生活からは姿を消してしまった川の文化を、1年半もの期間をかけて自身の身体を介して理解していった安藤は、それを再び現代人の身体へと結びつけるためのトレーニングジム「OGYM(ゼロジム)」として再構築しました。



0具-保津川下り権トレマシーン
2019-21年/保津遊船の廃材、権、棕櫚縄、カーブミラーなど
安藤が陸上で保津川下りの操船技術の一つである「権引き」を練習するために使用していたトレーニングマシーン。



0図-権の運動方程式その一
2021年/和紙、顔料、権の支点部分で作った判子
権引きの運動は、二つの円と一つの支点によって機能しています。この「円と支点の運動方程式」を図に表した作品。



0具-胡麻ゴリゴリ
2021年/すり鉢、すりこぎ棒、権、鉄パイプ、トタンなど
権を引くように、胡麻擦りを行うトレーニングマシーン。安藤は権引きという特殊な身体技法を、胡麻摺りという一般的な動きに繋げることで日常の生活に再接続しようとして試みている。

Program 3 Nantan Remix 2022

タウンミーティング

国際芸術祭『南丹アートフェスティバル2023(架空)』を考えてみる



日時 | 2022年10月22日(土) 14:00~15:30
会場 | 南丹市八木市民センター 文化ホール
ファシリテーター | Load na Dito
パネリスト | 京都南丹Yagi-JAM実行委員会(城戸康二、
國府美紀、廣瀬孝人) /
平井静男(南丹市地域振興部長)
オブザーバー | 荒木悠/身体0ベース運用法 /
Yukawa-Nakayasu

※Load na Ditoのマーク・サルバトスと平野真弓は、フィリピン・マニラ首都圏ケソン市からZoomで参加 ※タウンミーティングで出たアイデアやご意見等は「KYOTOHOOPを深める|Reading」ページにて公開しています。

「来年、南丹で姉妹都市フィリピン・マニラ市との国際芸術祭を開催するとしたら?」。マニラを拠点に活動するリサーチとアート・プロジェクトのためのモバイル・プラットフォームLoad na Dito(ロード・ナ・デイト)と南丹地域の住民、Nantan Remix 美術展覧会出展アーティストがアイデアを出し合いました。南丹市とマニラ市は、戦国武将で八木城主の内藤ジョアンがキリシタン追放令により高山右近らと共にマニラへ追放され、その地で死去したという史実を背景に、1985年に姉妹都市となりました。ジョアンという一人の人間の生き様が結びつけたこの二つのまちを、アートの視点を交えることでどう再編集/再接続し、次のフェーズへと展開させていくことができるのか。大堰川を舞台にした船上フェスティバルや、次世代のジョアンを育てるためのエクステンジプログラムなどの案が話し合われました。

ラウンドテーブル・ ディスカッション

地域とアート | アートと地域

様々な地域での滞在制作、発表経験のある3組のアーティストが、これまでの経験や自身のスタンス、課題と考えていることなどを話し合いました。

日時 | 2022年10月23日(日) 15:00~16:30
会場 | 南丹市八木市民センター 文化ホール
登壇 | 荒木悠/身体0ベース運用法 / Yukawa-Nakayasu
ファシリテーター | 宮下忠也
(地域アートマネージャー・南丹地域担当)



荒木悠

外から来た異物としてその土地の何に反応するかというところは常にチャレンジングで、でもそこが面白さでもあります。今、将来に向けた種まきが必要だと思っていて、子どもたちがわざわざ都市部に行かずに地域でアートに触れることができるということが重要。近所で、髭の生えた変なおじさんが変な映像を作っている。僕はそれでいいんじゃないかとも思っています。



身体0ベース運用法

アーティストとは、異なる場所の間に独自の視点で線を引いて、新しい星座を作ることのできる立場なのではないかと思えます。アートによって地域が活性化しているのかどうか、美術に興味のない人たちの反応って僕たちにはあまり伝わってこなくて…。でも、どうやったらもっと多くの人たちを繋げることができるのかはいつも考えています。もっと多くの人たちに参加してもらえような作品の形態があるのかもしれない。



Yukawa-Nakayasu

今までアートを介して関わってきた場所をもう一つの故郷みたいと感じていて、プロジェクトから数年経ってもその地域のことを自分ごとのように考えます。地域で制作する時には、チャーマン的な立場でいたいなと思っていて、その土地のものを食べながら地域の人たちとの会話とかも吸収しながら作品を作っていきます。さらには、地域の人たちが展示を見てどう思ったのか、「そういえば昔、こんなことがあった」といった記憶なども作品に含まれていきます。

※ラウンドテーブル・ディスカッションの詳細は「KYOTOHOOPを深める | Reading」ページにて公開しています。

参加アーティスト



荒木悠

アーティスト・映画監督

1985年生まれ。文化の伝播や異文化同士の出会い、またその過程で生じる誤解や誤訳の持つ可能性に強い関心を寄せている。特に、近年手掛けている映像インスタレーションでは、歴史上の出来事と空想との狭間にある物語を編み出し、再演・再現するような手法を展開している。2022年は、無人島プロダクション(東京)とRC HOTEL 京都八坂(京都)での個展に加え、大阪中之島美術館からのコミッション・ワークや、京都市京セラ美術館ザ・トライアングルでの『彦坂敏昭:砂のはなし』展内にて新作を発表した。



身体0ベース運用法

アーティスト/プロジェクト

染色作家・安藤隆一郎による「ものづくりの視点」から考える身体論で、ものとの関わりから生まれる身体の感覚、運動、機能をゼロから見直し、人間本来の身体の運用法を見出す試み。医学やスポーツといった専門的なものとしてではない、私たちの身の回りにある身体を、アートというツールを用いて翻訳し、伝えることで、身体の消えゆく未来へ向けてその可能性を問い直している。2016年活動開始。2017年には会場をジムに見立てた体験型展示『OGYM』(京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA)を開催。ワークショップやレクチャーを多数実施。



Yukawa-Nakayasu

アーティスト

1981年大阪府生まれ。歴史や習俗や習慣をもとに、社会や身体、日常に内在している営みや現象を視覚化する作品を制作。近年は「生命の循環」まで視野を広げ、生命の営みとその現象との相互関係を着目している。2019年からアートハブTRA-TRAVELを立ち上げ、2020年には『ポストLCC時代の』(京都芸術センター)などの展覧会をプロデュースした。



Load na Dito

アートチーム

リサーチとアート・プロジェクトのためのモバイル・プラットフォーム。キュレーターの高野真弓と、アーティストのマーク・サルバトスによって2016年から活動開始。型にはまらないプログラムの企画・実施の方法を試している。人、もの、イメージやアイデアが自由に反応しあうような状況作りに取り組み、「参加」や「協働」という言葉に含まれる問題と可能性を探っている。

連携・協力
(五十音順・敬称略)

オーエヤマ・アートサイト/川定 / 京都南丹Yagi-JAM実行委員会 / ちびねこ映画館 / 南丹市八木市民センター / 南丹浄化センター / みんなのTERAKOYAおおいがわ / 八木酒造

来場者の声

地域の声

- ▶「身近な何げない風景や人がとてもおもむきのあることに気がつくきました」(南丹市・60代)
- ▶「会場でていねいに解説をして頂き、自分で見るだけより深く感じることができました」(南丹市・60代)

南丹市以外からの声

- ▶「保津川下りの船にのってみたいになりました。權にさわらせてもらって、久しぶりにちゃんと体を動かした気がしました」(京都市・20代)
- ▶「展示会場に使われている商店の人たちが会場の場所や町の見所、歴史などを丁寧に教えてくださいましたのが印象的でした。作品だけでなく、今の町の様子を見学しながら楽しめました」(京都市・30代)

- ▶「水と時間は似ている。一方に進み、体感速度といわれるように速さが変わる。大堰川に呼応するかのごとく、ゆつくりとした時間が八木には流れている。だから、じっくりと作品に向き合うことが出来る。ぜひ次回も開催してほしい」(亀岡市・40代)

- ▶「水がよるこんでいた。現代アートと自然と文化的遺産との融合は不自然で不可能と思っていたが、ガラスに落ちるアートはそれをくつがえすと思えました。ありがとうございました」(亀岡市・50代)



地域プログラム | 京丹後市 | トークイベント

風景泥棒はどこへ？

ー地域×現代アートを語り合う

2018年から京丹後で実施したアーティスト・イン・レジデンス事業『京都:Re-Search in 京丹後』と、翌年から開催された展覧会『大京都 in 京丹後-風景泥棒』により、4年間を通して京丹後の多様な風土を巡ったアーティストたちとその作品により、地域はどのように変化し何を得たのか。それらの取組を契機に立ち上がった地域発のアーティストイベント『三津のちいさな芸術祭 織りかえす波の音』と連動し、地域からアートを生み出す取組の可能性と未来を考えることを目的に、『大京都 2021 in 京丹後』の舞台となった三津漁港にて、『京都:Re-Search in 京丹後』参加アーティストと地域住民で4年間を振り返るトークイベントを開催しました。

日時 | 2022年9月25日(日) 15:30~17:00

会場 | 三津漁港特設ステージ

入場 | 無料

来場者数 | 63名

登壇者 | SIDE CORE (アートコレクティブ) / 前谷開 (アーティスト)
高橋臨太郎 (アーティスト) / 澤佳奈枝 (翔笑瑠 / 三津の灯台珈琲)
小東直幸 (一般社団法人京丹後青年会議所 直前理事長) /
川淵一清 (まちの人事企画室代表) /
甲斐少夜子 (地域アートマネージャー・丹後地域担当)

主催 | 京都:Re-Search実行委員会 (京都府、他)

後援 | 京丹後市 / 京丹後市教育委員会

連動イベント | 三津のちいさな芸術祭 織り返す波の音
(三津の灯台アートプロジェクト実行委員会)



三津漁港のシンボルである赤い三津の灯台を背景に行われたトークイベント。登壇者の椅子には、『大京都 2021 in 京丹後』で発表された、京丹後の海岸線の安山岩などの岩場がプリントされたSIDE COREの作品が使用された。

アーティストから観えた景色

京丹後地域との交流を続けてきたアーティストたちにとって、滞在制作を行ったこの4年間はどのように観えていたのでしょうか。

地域外から来たアーティストとして、京丹後地域の魅力と制作中の悩みについて話してくださったのは高橋氏。「未編集の余白」と感じた京丹後にある手付かずの魅力に好奇心がすぐられたこと、制作にあたってはすでにある歴史や文化への配慮に悩んだと語ります。

SIDE COREの播本氏は制作の場としての魅力に焦点を当てました。都市部とは違う利点として「計画なく探検ができる余地があることがローカルの面白さ」と言及。また、リサーチ中に地域住民の方の協力を経て移動をしたことが、様々な魅力との遭遇に繋がったとも語ります。

自身の変容について語ったのは前谷氏。地域住民の方々と時間を共有し、交流を重ねたことで、一人で籠って制作をするスタイルから「人と関わって制作する方法も良いかも」と自身の領分が

広がったことを教えてくださいました。

地域で開催する『京都:Re-Search』の展覧会だからこそその試行錯誤について教えてくださったのは、展覧会の企画段階から携わったSIDE COREの松下氏。「アートを通して風景の見え方を変える」といった意味を込めた展覧会テーマ「風景泥棒」は、地域住民の方に「アートってわからないけど、まず見てみよう」と現代アート自体に興味を持ってもらうことを目指したと語ります。また、『京都:Re-Search』は地元のアーティストが参加したことも、地域住民とアーティストとの交流が深まった要因であると話します。そして、実は京丹後にとってこうしたアートの取組は新しいことではなく、過去から続いている大きな営みの一部であり、地域からアートが生まれるという「風景泥棒」の物語は、担い手が変わったとしても続いていくことであると、京丹後の現在地が示されました。



地域住民から観えた景色

『京都:Re-Search in 京丹後』をサポートした人々からはどのようにこの取組は観えていたのか。京丹後市青年会議所・直前理事長の小東氏からは、自身がネガティブな印象を持っていた機織りの音にアーティストが着目したことをきっかけに「彼らはどんな視点で京丹後の地域を見ているのか」と興味が湧き、時間を共有することで、アーティストたちの考え方に感化されるようになったと自身の変化について話がありました。また、『京都:Re-Search』をきっかけに「三津の灯台珈琲」をオープンした澤氏は、最初はアーティストの滞在制作について不安を抱いていたと語ります。しかし、アーティストと関わることでアートに対して愛着が生まれ、アート作品に対する捉え方が変わったとも言います。そして展覧会『大京都』をきっかけに生まれた交流が続くよう、ロゴを参加アーティストの高橋氏に依頼し「三津の灯台珈琲」が誕生したことを教えてくださいました。

展覧会『大京都』によってもたらされた賑わいについてお話くださったのは「まちの人事企画室」の川淵さん。移住してもらっただけが地域振興のゴールではなく、アートをきっかけに京丹後を訪れ、通ってくれる人との繋がりを持ち続けることが、京丹後の魅力にも繋がることだと実感できた催しだったと振り返ります。

3人の視点からも観えてきた「風景泥棒」がもたらしたモノ、そして向かう先。来場者として参加された京丹後市文化協会会長の松本氏は「京丹後はこんなに豊かな場所である」と来た人に言ってもらえることが、地元に住む我々の自信となり、当たり前に見てきたものへ光が当たる出来事でした」と4年間の『京都:Re-Search』を振り返りつつ、「この度の事業を経て、文化を分かち合いながら育むチャンネルができたことが京丹後の資産。このような文化の交流を長く続けていきたい」と締めくくりました。

※詳しいレポートは「KYOTOHOOPを深める」Reading」ページにて公開しています。

登壇者



Photo by Shin Hamada

SIDE CORE

アートコレクティブ

2012年より活動開始。ストリートカルチャーの視点から公共空間を舞台にしたプロジェクトを展開。路上でのアクションを通して、風景の見え方・在り方を変化させることを目的としている。野外での立体作品や壁画プロジェクトなど様々なメディアを用いた作品を発表。Reborn-Art Festival 2017、2019、2022に参加。『京都:Re-Search』(2018-2021)にゲストアーティストとして参加。経ヶ岬灯台に関する連作を制作。



澤佳奈枝

翔笑瑠(とびわり) / 三津の灯台珈琲

網野町三津出身。2020年5月翔笑瑠開業、マリネジャー業を開始。「大京都 2020 in 京丹後」で高橋臨太郎の作品の制作協力に関わる。(作品は三津八幡神社芝居舞台にて発表) 2021年4月 三津の灯台珈琲をオープン。同年5月 三津の灯台アートプロジェクト実行委員会を立ち上げる。

連携・協力

(順不同・敬称略)

三津の灯台アートプロジェクト実行委員会 / 明日の三津と海を考える会 / えびす会 / 京都府漁業協同組合網野支所 / 一般社団法人京丹後青年会議所 / 宇川加工所 / DAISAK / 奥口陽登 / 田茂井宏行 / 京丹後市 / 京丹後市教育委員会



前谷開

アーティスト

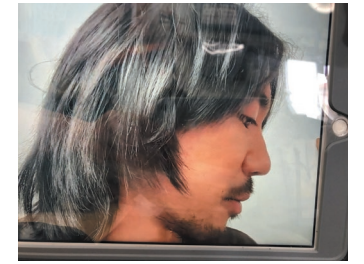
1988年 愛媛県生まれ。神奈川県在住。自身の行為を変換し、確認するための方法として主に写真を使った作品制作を行う。都市や自然、他者との関係における自身の立ち位置を確かめるように、カメラと身体によってそれらを記録し作品化する。『京都:Re-Search』(2018-2020)にアーティストとして参加。風景から見られているような感覚をイメージし写真と映像を使った作品を制作。2021年4月に京丹後市内の高校生を対象に自撮りワークショップを開催。



小東直幸

一般社団法人京丹後青年会議所 直前理事長

2019年度の京丹後青年会議所スローガン「感受性応答セヨ」のもと、まちづくり委員会委員長として「大京都 2019 in 京丹後」への地域コーディネーター、制作協力などに関わる。2020年、2021年も継続してプログラムに全面的協力を。その他、様々な形で地域への貢献活動を行っている。



高橋臨太郎

アーティスト

1991年 東京都生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程修了。自身の身体によって環境に働きかけるパフォーマンスや、立体、映像、インスタレーションなどをメディアに、物質や身体に限界までエネルギーを加え「変化する意識」について思考する。『京都:Re-Search』(2018-2020)に参加。その土地にある音を基点として演奏パフォーマンスや大きな楽器などを基にしたインスタレーション作品を制作。『三津の灯台50周年イベント』(2021)に参加。



川淵一清

まちの人事企画室代表

「大京都 2020 in 京丹後」バスツアーアシスタントとして関わる。ひとの仕事と暮らしのサポートをする「まちの人事企画室」を2020年設立し、未来チャレンジ交流センター rootsの運営責任者として、地域の方と高校生が挑戦・交流・学びのある場づくりや行政・企業への伴走支援をしている。



地域プログラム | 精華町 | 研修イベント

リアルコンサートホールで 何ができる？

～コンサートホールで次世代の聴衆を育てる～

京都府山城地域の音楽ホールで特色ある企画を実施する企画担当者たちを招き、次世代の聴衆育成などをテーマに、コンサートホールの活性化について考える研修イベントを開催しました。同時に、次世代の聴衆に向けて提案する参加型コンサートも開催。鑑賞者のホールでの音の楽しみ方を拡げることを目的に、バッハからボサノバまで音楽の多様性を提示するプログラムや、客席の聴衆とステージの演奏者がその場で音楽を創り出す音楽ワークショップを採り入れ、演奏者とコンサートを振り返るトークセッションも行いました。

日時 | 2023年1月25日(水) 13:45～16:30

場所 | けいはんなプラザ メインホール

入場 | 無料

来場者数 | 102名

出演・登壇 | 北口大輔(チェロ)／鈴木潤(ピアノ)／
橋本恭一(宇治市文化会館)／西田陽子(文化パルク城陽)／
伊藤佐和子(京都府立けいはんなホール)

対象 | 公共ホールの事業ご担当者
文化芸術団体・文化芸術NPOスタッフの方
自治体の文化関連ご担当者
音楽業界やコンサートホールの担い手を目指す学生の方
文化施設を応援したい地域の方 など

主催 | 京都:Re-Search実行委員会(京都府、他)

後援 | 精華町

第1部

チェロ&ピアノで贈る参加型コンサート

～コンサートホールの“音”をもっと楽しもう!～



鮮やかなチェロの《Julie-O》で始まり、J.S.バッハ《無伴奏チェロ組曲第1番》では北口大輔氏の磨き上げられた精緻な音に客席が聴き入りました。続いて登場した鈴木潤氏が、北口氏とボサノバの名曲《イパネマの娘》を披露。音楽の軸となる“リズム”の役割についてなど曲間トークの後、鈴木氏作曲の《マイレゲエ》で再びジャンルを超えたセッションが行われました。また、鈴木氏による“音楽ワークショップ”では、手拍子などを駆使してお客様と様々な音を作り出し、当日参加していた近隣の中学校の校歌をアレンジした爽やかな演奏で会場が一体となりました。

出演

北口大輔(チェロ)

鈴木潤(ピアノ)

プログラム

M.サマー —— Julie-O

J.S.バッハ —— 無伴奏チェロ組曲第1番
ト長調 BWV1007 より

プレリュード

アルマンド

サラバンド

ジーク

A.C.ジョビン —— イパネマの娘

鈴木潤 —— マイレゲエ

音楽ワークショップ

～コンサートホールの“音”をもっと楽しもう!

第2部

トーク&ディスカッション

ファシリテーター |
西尾晶子 (地域アートマネージャー・山城地域担当)

A 参加型コンサートのふりかえりトーク

登壇 | 北口大輔 (チェロ) / 鈴木潤 (ピアノ)

参加型コンサートを振り返り、「作品になる前の“音”を楽しむこと」などについて演奏者の視点を共有すると共に、「ピアノの蓋の開閉で響きを変えてホール内の“音”を楽しむのもあり」など客席からの提案もありました。「オンラインとリアルでの音の楽しみ方の違い」について、「オンライン演奏で奏者間にタイムラグが生じるのも実は面白い」という鈴木氏の発言を受け、北口氏の「良いオーケストラは奏者がこう弾きたいという想いが強く、近くで聴くと演奏がズレて聴こえるが、そのズレが響きを増幅させ、離れて聴くと分厚い響きができ上がる」という印象的な話に繋がりました。



B 「コンサートホールで次世代の聴衆を育てる」トークディスカッション

登壇 | 橋本恭一 (宇治市文化会館)
西田陽子 (文化パルク城陽)
伊藤佐和子 (京都府立けいはんなホール)

トークディスカッションでは、各ホールの課題などを共有した後、「次世代の聴衆を育てる」ことについて、「目の前のお客様により丁寧にホールや音楽の魅力を長期的に繰り返し伝えていくことが必要」などの意見が出ました。また「コンサートの感想をシェアする場を」との客席からの提案に対し、コンサートの余韻をその場で共有する機会を用意すれば、お客様同士の交流がホールを巻き込んだ交流に発展する可能性があるとしたうえで、「演奏者が舞台上で輝くように、ホール職員もその成長を喜んでくれるファンを持ちたい」という、新たなホール職員像も示されました。



※詳しいレポートは「KYOTOHOOPを深める | Reading」ページにて公開しています。

来場者の声

コンサート

▶「コンサートにあまり行ったことのない私でも楽しめた。チェロの音色を生で聴くのは初めてで、厚みのある豊かな音色を聴くことができ貴重な体験になった。校歌のアレンジがすごく綺麗でした。ありがとうございました」(中学生)

▶「ウクレレで老人ホームなどを周るが、(音楽ワークショップの)スイッチのリズム遊びが為になった」(50代)

▶「演奏だけでなく、マニアックな演者の音楽への意気込みや楽しみを聴けて楽しかった」(50代)

トーク&ディスカッション

▶「“次世代の聴衆を育てる”というテーマはとても深いテーマだと思うが、そこに敢えて切り込む勇気がすごいと思った。クラシックやコンサートホールとは違う場所で活動する別のアーティストや“次世代”に当たる中学生が客席にいたのが、新しい視点をコンサートホールに取り込むきっかけになると思う」(40代)

▶「クラシックコンサートの楽章間で拍手が出たことを、ある指揮者が「(タブー視することではなく)クラシック初体験のお客様が来ている証拠」と前向きに捉えた話が印象的だった」(30代)

出演者



北口大輔 チェリスト

東京藝術大学卒業、同大学院修士課程修了。ソリストとしてオーケストラとの多数の協演や幅広いレパートリーでのリサイタル、また室内楽奏者として、音楽専門誌等からも高い評価を得ている。
アセリア推薦新人賞、平成12年度大阪府舞台芸術奨励新人賞、平成31年度大阪文化祭賞奨励賞、令和2年度兵庫県芸術奨励賞など多数受賞。
東京都交響楽団チェロ奏者、九州交響楽団首席奏者、同楽団首席客演奏者を歴任し、現在、日本センチュリー交響楽団首席奏者。パシフィックフィルハーモニア東京客演ソロ首席奏者。大阪音楽大学特任准教授。



鈴木潤 鍵盤プレイヤー・作曲家

京都大学文学部哲学科美学美術史専攻を卒業後、鍵盤奏者として、国内外のレゲエアーティストを中心に、JUJU、EXILE ATUSHI、OVALL、Lamp など他ジャンルのアーティストもサポート。2010年ごろから自身のソロ活動や、江州音頭バンド「サンボーヨシ」「校歌部」など京都での地域密着型のユニークなバンドも行っている。演奏活動と平行して、2000年ごろから、子どもやお年寄りとの完全放置型音楽即興ワークショップ「音の砂場」を続けており、近年では、日本センチュリー交響楽団、京都女子大学、東京音楽大学等で、ワークショップのトレーニングや講座、コードを使った演奏の組み立て方と体の使い方を中心にピアノの授業などを受け持っている。

連携・協力 (順不同・敬称略)

宇治市文化会館 (指定管理者 アクティオ株式会社) / 文化パルク城陽 (指定管理者 公益財団法人 城陽市民余暇活動センター) / 京都府立けいはんなホール (指定管理者 株式会社けいはんな) / 京都府立南陽高等学校・附属中学校



地域プログラム | 福知山市 | 研修イベント

地域文化における 協働の可能性

～文化インフラの形成について～

地域文化の担い手はプレイヤーとして文化事業を行う個人・団体だけではありません。地域文化を整備し、事業計画などを立案する自治体やサポートする企業、そして鑑賞者などあらゆる立場からの参加が望まれます。2022年度の中丹地域プログラムでは、大阪市の文化事業として長年、地域の中でアートプロジェクトを実践しているBreaker Project ディレクターの雨森信氏をお招きし、「地域文化における協働の可能性」というテーマのもと、文化活動への関わり方、様々な立場からの協働の方法を考える研修講座を開催しました。

日時 | 2023年2月9日(木) 13:45～16:30

場所 | 市民交流プラザふくちやま 会議室3-3

参加費 | 無料

参加者数 | 17名

講師 | 雨森信 (Breaker Projectディレクター)

司会 | 朝重龍太 (地域アートマネージャー・中丹地域担当)

対象 | 文化芸術団体・文化芸術NPOスタッフの方
個人で文化事業を行う方
自治体の文化関連ご担当者
本プログラムのテーマに関心がある方 など

主催 | 京都:Re-Search実行委員会 (京都府、他)



1 講義 13:45～14:30

地域に根ざして活動するアートの実践 ～Breaker Projectの事例より～

第1部として、Breaker Projectのディレクターである雨森氏より日本におけるアートプロジェクトの変遷について紹介があったうえで、協働による地域文化活動の事例として、Breaker Projectの成り立ち、活動実績を共有していただきました。Breaker Projectは、2003年に大阪市の文化事業として開始された20年続くプロジェクト。芸術文化アクションプラン(2001年)のコンセプトとして「行政による支援から未来への投資へ」、「文化の消費から文化の創造への変化」が掲げられ、当時は行政と民間が協働して取り組む、画期的な創造的文化事業だったと「コト」の起こりについて語

られました。その後、実施方針や運営における変遷はありながらも、アーティストと共にまちの中に創造の現場をつくり、芸術文化と地域、社会を繋ぐことを目的として活動を展開してきたBreaker Projectの具体的な取組についても紹介されました。そして、20年も続く取組の重要な部分として、アーティストが実験的な表現活動に時間をかけて取り組む枠組づくりや創作のプロセスを住民と共有することで様々な関わりを生み出すマネジメントの役割、そこから生まれてくる副次的な効果について説明がありました。

2 ディスカッション 15:00～16:20

地域における文化活動実施における問題点を議論する

第1部を経た第2部では、雨森氏からプロジェクトを計画する際の方法論として、ロジックモデルの紹介がありました。その後、ロジックモデルにならない、個人や団体がそれぞれに抱える現状の「課題」と「のぞむ未来」を出し合い、ディスカッションが行われました。ディスカッションでは、参加

したアーティスト、行政担当者、地域のアートスペース運営者、プロジェクトを主催する方など、様々な立場から議論が行われ、それぞれの課題把握、今後の協働の展望が垣間みえる機会となりました。

ロジックモデルで抽出された それぞれの「のぞむ未来」と「課題」

参加者は中丹地域だけでなく、他の地域からも参加があり、京都府域が抱える未来像と課題の一端が可視化されました。

「のぞむ未来」

- 技量に関係なく作品や表現が発表できればいい
- 住民発信型のアートフェスティバルの開催
- 住民が積極的に参加発信できる地域社会づくり
- 地域美術館構想
- 地域の人々が日々アートに触れることができるまちづくり
- アーティストと企画側がいろいろなものを見方を共有して新たな価値をつくる
- お互いを認め合える地域
- 文化芸術に興味がある人のマッチングがたくさん起こってほしい

「課題」

- アートイベントに参加したくてもいつどこでやっているかわからない
- お金と時間
- 活動がマンネリ化
- 高齢化
- 地域の伝統芸能の継続
- 地域で芸術活動をしている人が行政に何を求めているかわからない
- 資金調達方法など、自立持続しているための支援とは
- 地域資源の活用方法

アーティスト・イン・レジデンス

京都:Re-Search 2022

京都府では、アーティストが一定期間滞在し、地域でリサーチを行うアーティスト・イン・レジデンス事業「京都:Re-Search」を実施し、地域の魅力やその可能性をアートの視点から引き出すことを試みています。2022年度は、与謝野町にアーティスト・串野真也氏、綾部市にアーティストグループ・ヒスロムが滞在しました。



講師

雨森信

Breaker Project
ディレクター

2003年より大阪市文化事業の一環として「Breaker Project」を始動、西成区を拠点に地域に根ざしたアートプロジェクトに取り組み、独自の表現手法を編み出すアーティストと共に新たな表現領域を開拓する。また「水都大阪2009」にて藤浩志のプロジェクト「かえるシステム」、「BEPPEU PROJECT2010」、「札幌国際芸術祭2017」、「さいたま国際芸術祭2020」などでキュレーターを務めるなど、様々な現場において地域に根ざしたプロジェクトの実践に取り組み、活動を通して「現代の社会における芸術の役割」を探求する。

 in 与謝野

 in 綾部



in 与謝野

テーマ

Beyond the Textile Boundaries — テキスタイルの境界を超える —

期間 | 2022年9月28日(水)～2023年2月20日(月)

地域 | 与謝野町(丹後地域)

昨年度、京都府域展開アートフェスティバル『ALTERNATIVE KYOTO —もうひとつの京都—』に、アートユニット「ANOTHER FARM」として参加し、与謝野町で展示や織物事業者とのトークイベントを行った串野真也氏が、再び与謝野町に滞在。リサーチテーマを『Beyond the Textile Boundaries—テキスタイルの境界を超える—』と据え、与謝野町の歴史・文化・自然等について、地域住民との交流を深めながらリサーチを行い、町の主要産業である織物(テキスタイル)の表現を拡張する作品を発表しました。

滞在アーティスト 串野真也

広島県尾道市因島出身。京都芸術デザイン専門学校を卒業後、イタリアに留学。帰国後、自然からインスピレーションを受け、ファイナルデザインをテーマにした靴の作品を最先端技術や伝統技術などを駆使して製作し、世界に向けて発表している。現在は、バイオテクノロジーなど科学技術を取り入れたアート作品なども積極的に取り組んでいる。

WEB | <http://masayakushino.jp/>



事業スケジュール

約5ヶ月の事業期間の前半9～11月は、毎月3日程度ずつ町内の各エリア(加悦・岩滝・野田川)に短期滞在、後半1～2月は町内で長期滞在をしながらリサーチや作品制作を実施。

事前リサーチ | 2022年9月～11月
滞在リサーチ | 2023年1月10日(火)～2月20日(月)
拠点 | 与謝野町金屋の一軒屋



キックオフミーティングの様子。

1 キックオフミーティング

2年目を迎えるにあたり、改めて串野氏の自己紹介からスタート。幼少期から現在に至るまでの紹介から串野氏の活動の背景に触れる機会となりました。後半には、与謝野町の魅力を「衣食住」の観点から再発見するワークショップを実施。「とにかく水が良い・丹後ちりめん・京の豆っこ米・ポップ・おしゃれ好き」など与謝野町への「好き!」が飛び交いました。

日時 | 2022年9月29日(木) 19:00～20:30
会場 | 旧加悦町役場庁舎2階研修室
参加者数 | 20名(定員20名)



公開リサーチツアー 加悦エリア編。綿摘み体験の様子。

2 公開リサーチツアー(全3回)

串野氏と参加者が共にリサーチ先を巡るツアーを短期滞在と併せて実施。織物事業者をはじめ、与謝野町の歴史や自然を訪ねました。また、ツアーの最後には、参加者同士で1日の発見を共有する振り返りの時間が設けられました。

第1回公開リサーチツアー 加悦エリア編
日時 | 2022年9月30日(金) 10:00～17:00
参加者数 | 5名(定員5名)
訪問先 | ちりめん街道/加悦鉄道資料館/綿摘み体験/安田織物株式会社

第2回公開リサーチツアー 岩滝エリア編
日時 | 2022年10月29日(土) 10:00～17:00
参加者数 | 4名(定員5名)
訪問先 | 株式会社一色テキスタイル/糸清/ちりめん工房 糸武/cream chocolate/株式会社丹菱



リサーチで訪れた野田川エリアの雲岩公園にて。

第3回公開リサーチツアー 野田川エリア編
日時 | 2022年11月23日(水・祝) 10:00～16:15
参加者数 | 5名(定員5名)
訪問先 | むらやま工房/庄紋紙店/川端デニム製作所/絢和

3 中間発表会

中間発表会では、リサーチの経過報告と成果発表の構想が発表されました。串野氏は成果発表について「自然と織物によって五感を取り戻すような作品にしたい」と語りました。会の終了後には交流会を実施し、串野氏と参加者だけでなく、参加者間での意見交換も行われました。

日時 | 2023年1月21日(土) 16:00~17:30
(交流会 18:00~19:30)

会場 | 京都府野田川ユースセンター 音楽ホール
参加者数 | 40名(定員40名)



中間発表会の様子。与謝野町内外から40名が参加。

4 京都府立宮津天橋高等学校 加悦谷学舎を訪問

串野氏が昨年度より希望していた高校生との交流が実現。家庭科の授業では、被服を学ぶ2年生を対象に「テキスタイルの可能性と未来」というテーマで、自身のアーティスト活動や近年の新しい素材、与謝野町のテキスタイルがグローバルに活躍していることなどを紹介。放課後には美術部員と座談会を実施し、お互いの作品紹介や進路についてなど、座談会ならではの語り合いが行われました。

日時 | 2023年1月24日(火) ①家庭科の授業 11:40~12:30
②座談会 15:45~16:45

会場 | 京都府立宮津天橋高等学校加悦谷学舎



京都府立宮津天橋高等学校加悦谷学舎を訪問。



オープンアトリエでは、参加者と共に雪道を歩いて制作場所へ。

5 オープンアトリエ

成果発表展示会の会場に決まった滝の千年ツバキ公園にて、参加者は串野氏と一緒に山道を歩き、作品制作を体験。オープンアトリエで参加者が木々に張り巡らせた糸は作品の一部となりました。

会期 | 2023年1月27日(金)、28日(土)、
2月3日(金)、4日(土)、10日(金)、11日(土)

時間 | 10:00~12:00

会場 | 滝の千年ツバキ公園

参加者数 | 20名(各回定員3名程度)



参加者個々の美意識に基づいて糸が張られました。

6 成果発表展示会

推定樹齢千年を超える日本最古ともいわれる巨木のヤブツバキ「滝のツバキ」の麓の林で、新作《時代を超越し、出会いは繰り返す Repeated Encounters Across Time》が発表されました。串野氏は、リサーチ活動をきっかけに地域の方々の間でも世代や職業を超えた交流が行われたことを受け、すでに与謝野町には目には見えない美しい生地があることに気づきました。歴史という人々の痕跡が織り込まれ、これからも絶えず織られ続いていく“生地”を作品で表現しました。

会期 | 2023年2月18日(土)、19日(日)
時間 | 10:00~17:00
会場 | 滝の千年ツバキ公園
来場者数 | 計185名
写真撮影 | Yuna Yagi (atelier now/here)



来場者の声

- ▶「大自然の中に作品があるのが新鮮で面白かった。山道を歩き、作品を鑑賞し、ツバキを見て、お休み処でゆっくりして…というような、ただ作品を見て帰るだけではない体験ができたのは貴重だし、この土地ならではの感じ」(20代)
- ▶「自然の力を借りた芸術を見ることがあまりないので、「人間関係の複雑さ」あるいは「人間の思考が巡る様」など、人によって様々な解釈ができる大変良い作品だと感じた」(20代)

- ▶「与謝野の自然、大地、歴史と人にアートを通じて触れ合えたこと、美しい時間をありがとうございました」(40代)
- ▶「普段、ありえないような体験をいくつもさせていただけました。芸術はきれいだったか、素敵だったかというくらいにはわかりませんが、楽しく、うれしく、目にも満足させていただけました」(40代)
- ▶「串野さんの素晴らしい世界観、そして与謝野の新しい一面を見ることができ、とても満足しております!」(30代)



オープンアトリエ後の団欒風景。



成果発表展示会の様子。

『京都:Re-Search 2022 in 与謝野』を終えて

今回のアーティスト・イン・レジデンスを通じて、アートの意味やアートによって繋がる人と人とのコミュニケーションの必要性など、多くを学びました。また、与謝野町で長期滞在をしながら地元の人達と交流を深めて行くうちに、その土地にしかない歴史を学び、住み続けている方々のお話を聞くことで発展していく作品の制作過程が、いかに重要で可能性を秘めているかを知りました。

与謝野町は繊維の町として発展しましたが、背景には豊かな自然やその自然を守り続ける人々の思いがありました。しかし、現在は双方の交流の機会が少ないように感じたため、それらの境界線を曖昧にし、年齢や地

域の壁も飛び越えて対話をするきっかけになるような作品にしたいと考えました。また、「テキスタイルの境界を超える」というテーマを掲げてプロジェクトに取り組みましたが、目に見えるテキスタイルではなく、人と人が織りなす概念としてのテキスタイルを表現することによって、新たな出会いや時を経て再び繋がるご縁を目の当たりにした時、複雑に糸が絡み合う作品を作って本当に良かったと実感しました。

この度のアートプロジェクトによって様々な境界線を超え、与謝野町が美意識の芽吹町として発展して行く事を心から願っています。

—— 串野真也

運営体制

主催・運営 | 京都:Re-Search実行委員会(京都府、与謝野町、他)

地域コーディネイト | 株式会社ローカルフラッグ

記録映像制作 | VEJ VISUAL AND ECHO JAPAN

成果発表展示会協力 |

小田藤太郎/小西俊明/株式会社丸正組/有限会社明人夢村 ちんさん/

臼井織物株式会社/小田修/滝区/よさの三四の森の会/

Ayaka Hana Suzuki

謝辞(順不同・敬称略)

京都府織物機械金属振興センター/丹後織物工業組合加工場/江原産業株式会社/織部 佐橋 登喜蔵/加悦鉄道資料館/与謝野酒造合名会社/デザイン椽/安田織物株式会社/牛田織物株式会社/青木順一/高橋由明/白敷持治子/コクチュール/こめはな織物/株式会社山藤/エグCafé/株式会社一色テキスタイル/糸清/ちりめん工房 糸武/東町岩滝大神楽保存会/cream chocolate/株式会社丹菱/板列八幡神社/板列稻荷神社/与謝野町織物技能訓練センター/与謝野町染色センター/茂籠龍一郎/丹後ちりめん歴史館/むらやま工房/庄紋紙店/川端デニム製作所/絢和/かや山の家/2rin(トゥリン)/京都府立宮津天橋高等学校加悦谷学舎



KYOTOHOOP 公式YouTube
与謝野町長との対談や、串野氏のリサーチの様子などを動画で公開しています。
<https://www.youtube.com/@kyotohoop/>



京都:Re-Search 2022

in 綾部

期間 | 2022年12月16日(金)～2023年2月28日(火)

地域 | 綾部市(中丹地域)

2019年度から綾部市を訪れてリサーチを続けてきたヒスロムは、昨年度、綾部市内に数多く存在する窯について考えるオンラインバスツアー《窯について-About the Kiln》を開催しました。今年度は更なるリサーチと制作のため、築100年を超える古民家を制作拠点とし、2ヶ月半をかけて、窯のリサーチと多種多様な窯を用いた制作に取り組み、成果発表としてバスツアー《窯についてII-About the Kiln II》を開催しました。



滞在アーティスト ヒスロム

加藤至、星野文紀、吉田祐からなるアーティストグループ。2009年より活動をはじめ。造成地の探検で得た人やモノとの遭遇体験や違和感を表現の根幹に置き、身体を用いて土地を体験的に知るための遊び「フィールドプレイ*」を各地で実践し映像や写真、パフォーマンス作品としてあらかず。近年の展覧会に、「hyslom itte kaette.Back and Forth」(Ujazdowski Castle Centre for Contemporary Art, 2019)、「ヒスロム仮設するヒト」(せんだいメディアテーク, 2018)。

*劇団 維新派 故松本雄吉がそう呼んだことによる。

事業スケジュール

事業期間は、12月中旬から翌年2月末までの2ヶ月半。ヒスロムは、12月は通いで、翌年1月からは綾部市内に滞在し、地域住民と交流をしながらリサーチや作品制作を行いました。

事前リサーチ | 2022年12月
滞在制作 | 2023年1月11日(水)～2月28日(火)
滞在拠点 | 綾部市小西町の一軒家



ヒスロムによる制作プレゼンテーションの様子。



公開制作での記録映像撮影の様子。



物部地域の方々の訪問の様子。

1 キックオフミーティング

ヒスロムから、活動の始まりである大阪の造成地での取組や、ポーランドでの滞在制作など、これまでの作品や活動の紹介を通じて、ヒスロムの活動原理について説明がありました。その後、昨年度に綾部市で行ったオンラインバスツアーから繋がる、今年度の滞在制作の目的や企画プラン、綾部市での活動の展望が共有されました。

日時 | 2022年12月16日(金) 19:00～20:30
会場 | あやべスペースビル(田舎生活研究所)1階 イベントホール
参加者数 | 21名(定員20名)

2 中間発表会

築100年を超える古民家にて制作活動を開始したヒスロム。中間発表として、かつて生活の場所であった古民家で行った、ヒスロムが“遊び”と称する“場”を使った様々な行為をオープンスタジオ形式で公開しました。初日には元住人の方が来場され、古民家の歴史について伺う場面も見られました。

会期 | 2023年2月3日(金)、4日(土)
時間 | 10:00～17:00
会場 | 綾部市物部町寺谷18
来場者数 | 49名

3 成果発表会

バスツアー

《 窯についてII - About the Kiln II 》

ヒスロムはリサーチの成果として、ものづくりと窯をテーマとした作品をバスツアーとして発表しました。ツアー参加者を乗せ綾部駅を出発したバスは、由良川を渡りヒスロムが滞在制作の拠点とし、ヒスロム工場と呼ぶようになった古民家へ。到着後には、古民家の歴史、ヒスロムと共同制

会 期 | 2023年2月23日(木・祝)~26日(日)
開催形態 | バスツアー形式(各日2便)
[午前便] 10:30(綾部駅発)~13:30(綾部駅着)
[午後便] 14:00(綾部駅発)~17:00(綾部駅着)
来場者数 | 計100名(各便定員20名)

作者が制作した4つの窯(ガラス窯・アルミ窯・寒天窯・マスカルポーネ窯)と窯に風を送る巨大吹子の紹介が、窯の実演を交えて行われました。また、ツアーの最後には屋根裏で、ヒスロムたちがこれまでに古民家で行った“遊び”を記録した映像も上映されました。



アルミ窯 | アルミ鋳物作品を製造する、アルミを溶かす窯。



マスカルポーネ窯 | 窯の熱を利用して上の槽に設置された一斗缶に熱を伝え、湯煎してマスカルポーネチーズを作るなど、調理ができる仕組みになっている。



ガラス窯 | 工場内で最も高温に耐えられる窯で、耐熱性は1,000度以上。ガラス作品の製造に使われた。



寒天窯 | もとは寒天を茹でるために使われた巨大な釜でお湯を沸かすため、火入れ用の窯が下部に作られた。



巨大吹子 | 古民家内廊下部分を用いて、窯に熱を送るために制作された巨大吹子。人力にて稼働する。



屋根裏 | 古民家での制作の様子を記録した映像が上映された。



ツアーガイド | バス内ではヒスロムの綾部での活動紹介が行われた。

参加者の声

▶「物作りに対する執念のようなものが伝わってきました。自然素材、生成、燃焼、冷却、解体、構築、過程、コンセプトの潜在的な領域に無数の歴史や想いが込められていると感じました」(20代)

▶「綾部市を初めて訪れました。関西近郊ながら移動が便利では無く、やや不安がありましたが、駅からバスに乗り、話を聞きながら綾部の風景を

眺めていると心が落ち着きました。会場の家に着いてからは、濃密に変化していく家(窯)にワクワクが溢れて、とてもよい時間でした。窯という発想は、技術も空想も広がりがありとても興味深いです。生活のなかに紛れているものを掬い上げて、綾部やこれまでの出会いによって発見したものと揉み上げて、新たな場が生まれていることに、希望を感じます。自分も真摯に遊んでいこうと思いました」(30代)

『京都:Re-Search 2022 in 綾部』を終えて

《窯についてII》は2021年度に行ったオンラインバスツアー《窯について》を下地に取り組みました。2019年より綾部を訪れてきたからこそ実現できたように思います。原田商店、妙徳寺、あやべ市民新聞社、現地で開催した作家や友人たち、物部地区の住人の方、みなさんの助けや理解があって実現できました。それは長期レジデンスが持つ魅力であると思います。ヒスロム工場に火がつき、様々な素材を溶かすため、参加者と吹子から風を作り出す遊びを出来たことが印象に残っています。

建築が解体や構築を繰り返し変形していくように、様々な素材は燃焼し冷却し生成されて

いきます。その過程において、モノとしての過去と未来という時間が含まれています。その時間を見落とさないよう想像し、動き作り続ける自分たちの体もまた、建築に内包されるモノになれるかもしれません。物部という地名は偶然でしょうか。一つの家を大きな窯として捉え、滞在期間をさらに引き延ばし、モノ部という部活の名称として、生まれてくるモノをしっかりと確認し報告していきたいです。《窯について》というシリーズ作品はこの先も継続していくプロジェクトです。今後も綾部市を訪れて活動を続けていきたいと思っています。

—— ヒスロム

《窯についてII—About the Kiln II》クレジット (順不同・敬称略)

出演 | ヒスロム／船川翔司／出川晋／林剛平／岡留優／ハタヨシユキ／田中拓真／大槻祐希／萩小田大我／三ヶ尻敬悟／松本成弘／はたゆきえ
映像出演 | ヒスロム／船川翔司／出川晋／岡留優／ハタヨシユキ／田中拓真／松下明正／南大輔／三ヶ尻敬悟／萩小田大我／松本成弘／林剛平
記録撮影(写真・動画) | 松見拓也
吹子制作 | ヒスロム／出川晋
窯制作 | ヒスロム／林剛平／小池やすし／萩小田大我
制作進行 | 朝重龍太(地域アートマネージャー・中丹地域担当)／三ヶ尻敬悟
協力 | 小池由佳子／重本晋平／はたゆきえ／松本成弘／金井悠／妙徳寺／有限会社原田商店／株式会社芝造園土木工業

運営体制

主催・運営 | 京都:Re-Search実行委員会(京都府、綾部市、他)

次世代育成事業

京都府では、子どもを対象とした文化芸術体験機会を拡充する取組として、教育機関や文化施設への派遣型アウトリーチを実施しています。普段は文化芸術に触れることの少ない地域における文化体験の機会を創出すると共に、「アート思考(芸術を生み出す時の思考)」を育む取組を行っています。



文化を未来に伝える次世代育み事業

地域・アート・出会いプロジェクト

京都府内の児童生徒に対し、質の高い文化・芸術を体感する機会を提供するプロジェクトです。児童の豊かな心を育成すると共に、京都の文化・芸術の振興と次世代への継承を図ることを目的としています。事業の実施対象は、主に京都府内の小中学校（京都市立は除く）、府立特別支援学校とし、文化芸術体験事業に携わる専門家を派遣しています。また、地域の魅力を再発見・継承を目的としたプログラムや、教材開発や指導に活用してもらうことを目的とした教員向けプログラムも実施しています。

主催・運営 | 京都府文化スポーツ部文化芸術課
講師 | 京都府の文化芸術団体およびクリエイター等

① 体験プログラム

対象 | 小学校・中学校・特別支援学校
1回のプログラムから、複数回にわたる体験授業まで、授業時間内で実施しています。内容は、講師やコーディネーターが担当教員と相談をしながら、子どもたちの状況や実施目的に応じて決定します。

② 合同鑑賞プログラム

対象 | 小学校・中学校・特別支援学校
地域の文化施設やホールで行うプログラムです。近隣の学校と一緒に、能や舞台芸術などの合同鑑賞会を実施しています。

③ 地域と共に文化探求・発信プログラム

対象 | 小学校・中学校・特別支援学校
地域に根づいた文化を調査・体験し、発表をするまで計画的に実践するプログラムです。

④ 地域の伝統文化継承プログラム

対象 | 小学校・中学校・特別支援学校・高等学校
祭りや郷土食など、地域の伝統文化を受け継ぐことを目的に、地元の保存会などと協力し、複数回継続した活動を行うプログラムです。

⑤ 教員向けプログラム

対象 | 教員（小学校・中学校・特別支援学校・高等学校）
教員を対象にワークショップを行うプログラムです。教科の研修や校内研修などで、教材開発や指導に活用してもらうことを目的に実施しています。

2022年度の各プログラム実施件数・参加者数

- | | |
|----------------|-----------------|
| ① 61件 / 3,898名 | ④ 9件 / 1,825名 |
| ② 4件 / 546名 | ⑤ 1件 / 29名 |
| ③ 1件 / 30名 | 合計 76件 / 6,328名 |

2022年度の 開講ジャンル 一覧

- 古典芸能 | 落語・邦楽・能楽・狂言・囃子・日本舞踊
- 伝統工芸 | ロウケツ染・竹工芸・陶芸
- 伝統文化 | 香文化・着物文化・茶道・書道・いけばな
- 美術 | 絵画・造形・ステンドグラス・日本画
- 音楽 | 音楽基礎・合唱・歌劇（オペラ）・童べ歌・
楽器（和太鼓、オカリナ、二胡、アフリカン・ドラム）
- ダンス・演劇 | ダンス・パントマイム・演劇・バレエ
- 劇 | 人形劇・影絵芝居
- その他 | 映像・建築

Pickup

体験プログラム

図工「ステンドグラス体験」 京丹波町立瑞穂小学校 × JAHPON LAND



瑞穂小学校の4年生が、普段なかなか扱うことのできないステンドグラスに挑戦。7点のパーツを組み合わせて「スマイルバーガーランプ」を作りました。「楽しかった!」、「銀のやつ（ハンダ付け）が難しかった」、「（ハンダコテの）熱が怖かったけど、火傷に注意してやったらうまくいってよかった」など、子どもたちは自分の作品の出来にとっても満足そうでした。

音楽「能『敦盛』の体験・鑑賞」 伊根町立伊根中学校 × (公社)能楽協会京都支部



伊根中学校の1~3年生が、2022年度から音楽の教材となった『敦盛』を体験・鑑賞。能楽の解説から謡・仕舞・能面体験を経て、知識と体験を通して「能楽」鑑賞の要点を学びました。最後には『敦盛』のシテ舞と謡が披露され、丹後地域では鑑賞機会が少ない「能楽」を間近で鑑賞。実演後の質疑応答では、舞台の魅力だけでなく「能楽」の教えにも触れる機会となりました。

その他のプログラムレポート | 「KYOTOHOOPを深める」Reading」ページにて公開しています。



次世代アートツアー

教えてウォーホル! What is POP?

1960年代のアメリカで大量生産・消費や大衆文化を題材とし、ポップアートの旗手となったアンディ・ウォーホル。2022年度に京都市京セラ美術館で大回顧展『アンディ・ウォーホル・キョウト / ANDY WARHOL KYOTO』が開催されることを契機とし、ウォーホルの芸術的プロセスを体験する、大人から子どもまで楽しめるワークショッププログラム『教えてウォーホル! What is POP?』を開催しました。

本プログラムは、アメリカ・ピッツバーグにあるアンディ・ウォーホル美術館の協力を得て実施。「価値とは何か」「オリジナリティとは何か」という問いを投げかけ、手を動かしながら考えるアート制作の環境を提供すると共に、多様な発想により生まれるアートの楽しさや素晴らしさを共有する、地域と世代を超えるポップアート体験イベントとして、京都府域の文化施設と高等学校を巡回しました。

運営体制

主催 | 京都:Re-Search実行委員会(京都府、他)
 運営 | 株式会社ソニー・ミュージックエンタテインメント
 ワークショップ運営 | MUZ ART PRODUCE
 ワークショップ運営補助 | 宮崎淳子(アートマネージャー)
 講師 | 泉川真紀(インディペンデントキュレーター)
 実技講師 | 大野紅(H.A.M.printers(シルクスクリーン刷り師))
 飯沼洋子(アーティスト・日本学術振興会特別研究員)
 実技補助 | 京都精華大学学生、京都芸術大学学生
 プログラムコーディネート | 京都府文化スポーツ部文化芸術課

共通ワークショッププログラム

①ポップ・アートについて学ぼう!

ウォーホルの故郷、アメリカ・ピッツバーグにあるアンディ・ウォーホル美術館からの特別動画を上映し、ウォーホルの生い立ちや彼のシルクスクリーン作品の制作過程を紹介しました。

②シルクスクリーンを体験しよう!

アンディ・ウォーホルのポートレートを使ってオリジナルトートバッグを制作。トートバッグへの着色とシルクスクリーンの単色刷りというシンプルな工程により、年齢に関係なく楽しめる体験プログラムとなりました。

画材 | 無地のトートバッグ、布用絵の具、筆、チャコペーパー、
 ポートレート(アンディ・ウォーホル*)、シルクスクリーン
 *アンディ・ウォーホル美術館提供



文化施設 編

文化施設編は、世代や立場等を超え、今なお人々を魅了するアンディ・ウォーホルから続くポップアートの楽しさや面白さを共有する文化芸術体験イベントとして実施。次世代を中心に据えた全年齢対象とすることにより、アンディ・ウォーホルが用いたシルクスクリーン作品制作の技法を体験するワークショップを通して、世代を超えた文化芸術交流の場ともなりました。

対象 | 全年齢 (高校生以下は保護者同伴)

所要時間 | 1時間半程度

参加費 | 無料

▼北部・京都市

2022年10月23日(日) 舞鶴赤れんがパーク

2022年11月6日(日) 京都市京セラ美術館

時間 | 11:00~12:30 / 13:30~15:00 / 15:30~17:00

対象 | 全年齢 (高校生以下は保護者の同伴が必須)

参加者数 | 計184名 (各日3回・各回定員30名)

▼南部

2023年1月14日(土) お茶と宇治のまち歴史公園・茶づな

2023年1月28日(土) サンガスタジアム by KYOCERA

時間 | 12:30~14:00 / 15:00~16:30

対象 | 全年齢 (高校生以下は保護者同伴必須)

参加者数 | 計183名 (各日2回・各回定員40名)

▼プログラム内容

- ①挨拶 (問いかけ、ワークショップの目的を共有)
- ②「ポップ・アートについて学ぼう!」
- ③「シルクスクリーンを体験しよう!」
- ④まとめ (振り返り、アンケート記入)



参加者の声

文化芸術体験の楽しさ

- ▶「いろをぬるのがおもしろかった」(10代以下)
- ▶「色をぬっている時はまだ失敗かどうかはわからない。できてから結果がわかるから、面白く感じれる。楽しかった」(10代)
- ▶「約10年ぶりのもの作りで非常に楽しかったです。久しぶりに美術に触れることができました!」(20代)
- ▶「子供と一緒にものづくりができてよかったです。芸術に興味を持つきっかけになりうれしい」(30代)

作品制作に対する印象の変化

- ▶「動画を見た時は本当にできるか不安になったけど、やってみれば楽しかったのでやってよかったです」(10代以下)
- ▶「どうやったら、日常使いできるのかを考えつつ、それはアート本来の形では無いのかもしれないと考えさせられました」(20代)
- ▶「時々起こるズレ、最後の最後に黒をのせて一発勝負のところ、そこが大量生産とのギャップで面白い作品となる所なのかと思いました。とっても面白かったです」(30代)
- ▶「小さな子供と参加しましたが、ダイナミックに絵の具を使い、とても集中して楽しんでくれました。幼稚園でのお絵かきの時間は大嫌いと言っていたのですが、今日の体験から苦手意識がなくなったように思います。ありがとうございました」(40代)

見方の変化

- ▶「世界に一つだけの作品が作れて楽しかったです。黒で顔を刷ると一気にまとめてすごいなと思いました。体験を通してよりアンディ・ウォーホルさんのすごさが分かりました」(10代)
- ▶「同じスクリーンを使っているけど、人によってデザインや色の使い方が異なることが作品に広がりを持たせ、幼い子供でもできる気軽さは「大衆」アートであると感じました」(20代)
- ▶「シルクスクリーンで大量生産の後に価値があるのはなぜだろうと思いましたが、一緒に参加した家族4人も会場の別の参加者も同じ素材で全く違う作品が出来上がっており、ここまで違うんだと驚き、感動しました」(30代)
- ▶「自由に」と思っていたのですが、なかなかそうもいかず。しかし、予想通りにいかない偶然の良さを体験できたと思います。参加できてとても良かったです。ウォーホルが制作した時、どんな気持ちだっただろうと、想像しながらもう一度展示を見たいと思います」(40代)
- ▶「孫とこんなことが出来るのかと感心しました。若い人に交じって作った時がとても楽しかったです。理屈がはつきりわからなかったのが、またこんなことがあったら再度してみたいと思いました」(80代)

高等学校 編

高等学校編では、ワークショッププログラムと共にポップアートやシルクスクリーンの講義も実施。ウォーホルが社会・文化・有名人など、自己の外からの刺激や影響を受け、作品制作やアクションを起こした背景を知り、ウォーホルの作品制作を体験することを通して、自己の外にある社会や地域などをアートの視点で再発見する魅力を、高校生たちに共有しました。また、講師陣をはじめとした運営スタッフとの交流を通して、芸術に携わる職種はアーティストだけではないことを知ってもらう、文化芸術事業の魅力を伝える取組にもなりました。

対象 | 京都府立高等学校の生徒及び教員
※宮津天橋高等学校回のみ丹後地域の府立高校生を募集

所要時間 | 3時間程度

参加費 | 無料

参加者数 | 計109名(各日定員30名)

▼会場校

2022年11月19日(土) 亀岡高等学校

2022年11月29日(火) 福知山高等学校

2022年12月10日(土) 宮津天橋高等学校宮津学舎

2022年12月13日(火) 城南菱創高等学校

▼プログラム内容

- ①挨拶(問いかけ、ワークショップの目的を共有)
- ②「ポップ・アートについて学ぼう!」
- ③講義「ポップ・アートについて」
- ④講義「シルクスクリーン技法について」
- ⑤「シルクスクリーンを体験しよう!」
- ⑥まとめ(講師による講評、アンケート記入)



参加者の声

作品制作に対する印象の変化

▶「作品を作るって何もないところから作り出すものだと思うけれど、今あるものを変えたり使うっていうウォーホルのやり方って本当に常識をくつがえすものだと思います。今でこそウォーホルの作品の認知度からメジャーなものとしてされているけれど、当時はそうじゃなかったと思うし、自分のやり方を貫いたウォーホルがかっこいいなと思いました」

▶「出来あがり想像しながら色を塗っていく過程が黒を刷り終わった瞬間に何とも言えない面白さを感じました。思っていたより黒い部分がズレていたりしてもオシャレになって、そこが良くなったり、奥が深そうだなと思いました。ウォーホルは大量生産・大量消費に目を向けていましたが、今でも問題視されているテーマを1900年代から目を向けていたことに感心しました」

見方の変化

▶「みんな色々な作品を作っていて芸術への見方が広がりました」

▶「最初の色を塗った上にシルクスクリーンではっきり形が浮き出てくるのが面白くて、とても楽しかったです。人によって表情は同じなのに、雰囲気違って見えるのも個性が出ていて素敵でした」

▶「今回のワークショップに参加し、あまり理解ができず関心がなかった現代美術に対してこういった見方があるのかといった視点が広がり、とても良い機会となりました」

▶「価値観や、人の感じ方というのがそれぞれあり、何をどう思うか時代によっても場所によっても全然違うのだなと思いました。自由でも自由じゃない芸術はおもしろいです」



新たに生まれた興味や問い

▶「シルクスクリーンをやってみたくらいと思っていただけで、今回のワークショップはとても楽しかったし、良い機会になりました。ウォーホルのインタビューの映像を見て、ウォーホルの作品を作った意図や思いが気になりました」

▶「ポップアートで表現するという事は、ポップアート自体に思想が含まれていなくても、そのような媒体で表現するというのが自分の思想の表明なのだなと思った。ポップアートを何のために描くのか考えたとき、お金のためなのか世の中のためなのか、はたまたまウォーホル自身のためなのかかわからないなと思った」

▶「芸術と芸術じゃないものの境界線は人それぞれでぼやぼやしてるんだなと思いました。もっとうろんな人の考えを聞いて、自分の定義を定めたいなと思いました」

おわりに

2020年度初頭の新型コロナウイルス感染拡大から始まり、ロシアによるウクライナ侵攻や世界的な物価高など、社会の変容に一人一人が変化を求められ続けている2023年の現在。本事業が実施してきた、各地域が秘める可能性や魅力をアートの視点を通して引き出す取組の中で、地域の方にお聞きした声が思い出されます。地域で行われるアートイベントやプロジェクトに対し「突然に現れた“アート”という未知のものに戸惑いや不安を覚えた」という声です。けれど、その方々は丹後や南丹の地域プログラムで連動したイベントのように、今では地域活性化を目的としたアートプロジェクトやイベントを自ら実施されています。

“時が物事を変えると人は言うが、実際は自分で変えねばならない
～They always say that time changes things, but you actually have to change them yourself～”

——アンディ・ウォーホル

次世代アートツアーでテーマとしたポップアートの巨匠アンディ・ウォーホルが示したこの言葉のように、本冊子で報告をした地域の方々や参加者の皆様の変化は、私たちの取組に対して、それぞれが時間を自発的に作ってくださったからこそ生まれた変化です。

2023年3月27日に京都に文化庁が移転されることを契機に、今後も各地域で芽吹き始めた取組を地域の方々と共に育てていけるような取組を続けてまいります。多大なるご支援、ご協力を賜りました皆様に厚く御礼申し上げます。そして、引き続きのご関心、ご協力をお寄せいただければ幸いです。

京都:Re-Search実行委員会
(事務局 | 京都府文化スポーツ部文化芸術課)

発行日 | 2023年3月発行

発行 | 京都:Re-Search実行委員会(京都府、他)

編集 | 京都府文化スポーツ部文化芸術課

表紙 | KYOTOHOOPロゴ(三重野龍)

デザイン | 岸本昌也

印刷・製本 | 株式会社グラフィック

発行 | 京都:Re-Search実行委員会(京都府、他)

令和四年度文化庁文化芸術創造拠点形成事業

